

編集室

* 前回（2013年7月号編集室、筆者担当分）に引き続き、更に国際化について記します。

* 今月号の小特集「酸化物エレクトロニクス」はいかがででしょうか。日本の材料研究の成果から始まったと言っても過言でない酸化物エレクトロニクスは、今や世界的に大きな潮流になろうとしています。その科学技術の基盤としての活力と波及分野の多彩さをお感じ頂けましたらうれしく思います。

* この小特集は、本会エレクトロニクスソサイエティ（エレス）がメンバーとなっている会誌編集委員会ワーキンググループC（WG・C）が中心となって、企画しました。エレスは本会の中でも、恐らく最も「もの寄り」のソサイエティかと思います。（エレスニューズレター、No. 155、2014年1月号にも記述。）その仕事は、デバイスやサブシステムを中心とし、そこで新たな原理探求とものづくりを行っています。そのことが、もしかするとエレス会員の英文での論文発表（他学会英文誌も含む）を一層促している側面があると、時々思います。すなわち、論文執筆に際しては、アイデアとそれに基づく物理的な構成や構造を説明し、実験事実を披露し、その有用性を述べることになり、ものに基づいて具体的に記述することが多くなります。温度を何度にして何分間作用させた、といった記述は英文で書くことも比較的容易かと思えます。一方、抽象的・概念的な議論を英文で精緻に記述することは、日本人には少し骨の折れる作業かもしれませぬ。エレス分野ではその機会は相対的に少ないように思います。こうした分野の傾向もあってか否か、エレス会員の国際的活躍は、本会の中でも特に進んでいるように感じます。本会とよく対比されるIEEEの各ソサイエティで執行委員会メンバーになっている会員も多いです。IEEEで科学技術・教育をプロモートすれば、本会で必ずしも類似のことを行わなくてもよいのではないかと、いった声も時に聞こえてきます。

* しかし筆者は、本会が世界で独自に果たす役割は大きいと考えています。なぜならば、世界の多様な文化を尊重し育てる科学技術環境を作り出すことが、科学技術自身にとって普遍的に重要だと考えているからです。近い将来にグローバル化が極限まで進み、もしもその結果、より均質で単調な世の中を生み出すことになったとしたら、発想の多様性まで損なわれてしまう気がします。近年、インパクトファクタといった一見客観的ですが大雑把に過ぎるもの差しが重宝されるのも、その一端と感じます。

* 人の論理的思考は使用している言語に支配されていますし、直感も文化・環境に大きく左右されます。論文誌における発表の仕方が英語であることは構いません。しかし様々な人が、いろいろな言葉で考え議論し、異なる文化で生きることによって生じる、科学技術全体の堅固さ、といったものが重要ではないかと考えます。ちょうど、生物の進化における多様性の重要さに相当するものです。科学技術が最終的には人々の生活へのインパクトで評価されると考えると、その評価には現代においてもなお長い年月がかかります。それは自然淘汰とも言える過程です。そこでは科学技術の多様性が重要な意味を持ちます。

* 会誌は、論文誌と比べていわば「種をまく」役割を担っています。これを英語で世界に届けられればどんなにすばらしいか、と常々思います。これだけ優れた会誌記事を、日本語を解する人のみで独占することは、いかにももったいない。何かうまい方法はないでしょうか。著者に会誌記事を複数言語で記述してもらうことは、その負担が大きそうです。英訳することでこれを達成しようとする、現実にはなかなか難しいとも聞きます。翻訳にかなりの費用がかかり、そこを節約するとうまく翻訳されないことが多いようです。この課題も、電子情報通信技術の進歩で何とか解決したい。そしてその機能をI-Discoverの将来の拡張版に搭載できないか。発想の多様性を維持しながら、情報の流通を促進する。これも本会の大きな役割になると、筆者は考えます。

* 日本の種が大きく世界に広がった酸化物エレクトロニクス。こんな風に、様々な地域やコミュニティで生まれた種が、世界の人々の生活にいろいろ花開く。そのような展開の触媒となる学会と会誌であれかしと願います。

（編集特別幹事 廣瀬 明）

御意見をお寄せ下さい！

会誌編集委員会では、より魅力ある誌面づくりを進めていくにあたり、読者の皆様からの御意見・御提案を広く募集致します。

会誌に対する全般的な御意見・御提言、掲載記事への御意見・御感想などを、以下のフォームにて、事務局までお寄せ下さい。

<http://www.ieice.org/jpn/books/kaishiiken.html>

※御意見につきましては、会誌掲載の「読者のページ」に掲載させて頂く場合がございます。